

【個人研究】

女性のスピリチュアリティ 序説 - 女性性の回復にむけて -

土 沼 雅 子*

Introduction to Women's Spirituality - Toward Regaining Femininity -

Masako DONUMA

Through clinical work experience, I have seen women in contemporary society who suffer from low self-esteem, an inner void, and loss of meanings in life. Although this is the case with women, men are not aware of their own sufferings in the male dominant world. Not only women but also the earth and nature are in need healing. I consider, as a reason for this, femininity has been devalued and traditionally it was alienated from the world. Thus, I will explore in what ways women as the embodiment of femininity were regulated and how women were forced to live through examination of old tales, myths, dreams, and clinical cases.

The objectives of this thesis are discovering, redeeming and regaining women's spirituality. By doing so, I think women can regain wholeness and their relationship to men change. As a result, men are relieved of their sufferings. The earth and nature are healed. In this introduction, I took up one of Arthurian legends, "Sir Gawain and the Loathly lady" and pointed our relationship to the rejected, despised aspects of femininity as a point of departure.

1. はじめに

「女性のスピリチュアリティ」をどう扱っていいかと考えていた夜、次のような夢を見た。

【水晶とエメラルド】

「わたしのものであるちいさな卵くらいの透明な水晶と、エメラルドがたくさん、道にばらまかれている。わたしは自分の大切なものを落としてしまっていると思い、一生懸命

拾い集める。やっとひとつ残らず拾えて、ほっとする。そうしたら、またそれが散らばってしまい、いつの間にか落とす。そして、また拾うということを繰り返している。心の中で、落とさないようにと決心している。」

一般に夢のなかの宝石は自分自身の中の精神性や価値を象徴していると考えられる。この夢では、筆者はまだしっかりとスピリットを保持していない。落としたり、ばらまいたりして、意識してきちんと大切に保持することが、必要のようである。透明な水晶は、

*どぬま まさこ 文教大学人間科学部臨床心理学科

純粹性、導きの象徴であり、統合を暗示するものである。グリーンのエメラルドは生命力や平和そして、癒しを象徴するものであろう。これらの二つの宝石は筆者のスピリットの2側面を表しているのではないかと、一応分析しておくこととする。おそらく、この論文が完成するころには、より深い解釈がなされることであろう。

以前の筆者の著書(1994)の冒頭にあげた夢は、エロスの的なもので、筆者の内的アニムスによって、導かれていくものであった。それは、まだ未熟で、眠りの森の姫のように、あるいはシンデレラのようにアニムスに従い、依存していた。ここでは詳しい考察は省くこととし、後の機会に譲りたい。

今回このテーマを選んだのは、長い間の臨床経験のなかで出会った女性たちの苦しみや痛みが、女性であるということときっても切れないものであり、女性にしか理解できない、言葉にならない深いレベルと関係していることを感じてきたからである。男性の書かれた論文や、専門書に接しても、いまひとつ、女性の苦しみに近づけていないというもどかしさを感じてきたことにもよっている。たとえば、ピンスワンガー(L. Binswanger)の有名な症例エレン・ウエストについて、ピンスワンガーは「上昇と落下の垂直軸は人間存在の根本特徴である」と言いつつ、エレンが空の明るい世界と地下の暗いあなぐらに引き裂かれていたと分析した。エレンの世界、実存様式をピンスワンガーがその当時にこのように理解したことは評価できるが、彼は、決してそれを共感し受け入れることはできなかった。彼女の、光の精、空気の精になりたいという欲求は非現実的な世界であり、地面のそこらうづくまり、はいずれの世界は病的(分裂病)な世界として分析、解釈されただけであった。もし、当時女性の治療者がいて、彼女の全体性への渇きを理解し、受け止められていたならば、エレンは自殺しなくてすんだのではないかと感じてきた。グノーシス派のテキストでは女性的なものは「天なる光」「知恵

の光」と述べられていることを指摘しておきたい。筆者は、そこに女性のスピリチャリティが無視されたまま男性社会に生きる女性たちの苦悩と癒されない女性の普遍的な実存様式を見出すのである。それは現代においてもほとんど変わりはない。

たとえば、過食や拒食、各種の嗜癖、リストカット、ボーダーラインと呼ばれる一群の女性たち、熟年期の女性たちの無気力、うつ状態、多発する離婚問題、男女の関係などのなかに、筆者はひとつひとつの内的な全体性への渇きを感じてきたのであった。また最近女性の権利が以前よりは認められては来たが、根深い男性優位な社会は変わってはいない。最近母親が自分の子どもを殺す事件があいついだ。テレビで、専門家と称する男性が母性の喪失であるとコメントしていた。確かに母性の問題は、現代につきつけられた再考すべき重大な問題といえる。しかし、それはその女性だけの問題であり、病理から来る特別なものと考えているようなくちぶりであった。はたしてそれですましてよいのだろうか。女性にとって育児は生涯のうちで最も至福を感じられる期間である。と同時に周囲の理解と支えがなければ、大変な苦勞にもなりかねない。自分自身を尊重される経験もなく、理解されたこともない愛情と慈しみに飢えた孤独な母親がどうして、子どもをこころから愛し慈しみ、その面倒をみれるだろうか。これまでの社会は、養い育て、受容的で、世話をするとした女性的・母性的な側面の価値を、無意識的に低く見、男性的である部分を過剰に発達させた。多くの男性は、自らの女性的部分を疎外し、自分たちの内部ではなく、外部の女性にその部分を投影し、求めてきた。それは「女性は当然母性的であるべきである。しかし、それは、女性の本能であり、価値の低いものである」ということである。そのため、女性もまた、みずからの女性的あるいは母性的部分が、価値の低いものとみなされていることを感じとり、どうしても女性本来の特性と同一視することが難しい。男性性の価値が

優位な社会では、女性も男性と同様に社会的に有能でなければならないし、自らもそうありたいという思いを持つ。また他方では、母性的にひとを養い、世話したいという思いを持ち、男性からもそれを女性の役割として期待される。さらには、女性として、男性を喜ばせる容姿と性格を持ち、性的にも男性を挑発し、魅力的であることが期待される。最近では気軽に、自分の身体や顔を整形したりする女性が増加した。それは一体誰のためのものであろうか。何のためのものであろうか。ほんとうに、自分が望むことなのであろうか。女性自身が真剣に取り組み、考えなければならない問題である。豊田(1995)は、今日の女性の共通の問題として、自信のなさ、自己価値感の低さ、よりどころのない空虚感、存在の希薄さをあげている。筆者も、クライアントの女性たちの自尊感情の低さ、母性についての不確実感、生きる意味の喪失、男性に対する依存心と敵対心などを感じてきた。豊田はユング派の分析家であるマリオン・ウッドマン(Woodman, M.)を引用し、「現代文明社会に生きる女性たちはすべて『父の娘』であり、女性たちは知らないうちに男性の期待に沿って、あるいは男性からの評価を求めて行動し、自分たちの足場を不確かにしてしまっている」とし、「多くの女性はしらないうちに、世界を、または自分自身を父親の眼でみてしまい」と述べ、そのことが女性に自分の気持ちを裏切ったり、傷めつけたり、否定する方向に走らせると考察している。

この筆者の論文の最終目的は、冒頭の夢に暗示されてるように女性性のスピリットを見出し、保持すること、つまり内的世界的女性性を、いかにして目覚めさせ、救済し、回復するのかということである。男性に都合のよい女性性ではなく、本物の、本来的な女性性を探索していきたい。本論ではまず、序論として、問題点をあげ、今後の足がかりとしておきたい。伝統的に、典型的には魔女裁判に見られるように、女性性を体現していると思われる女性たちは、価値を低められ、虐げら

れ、男性と対等には扱われてこなかった。二十世紀は男性性の、一方向の、英雄神話に支えられた時代であったとしたら、この二十一世紀は、女性性の救済と回復の時代だといえるのではないだろうか。英雄とは、力と才覚で成功をおさめる個人を表している。野心をもち、正義心にあふれ、前向きに戦う人や、意志の強い人など、現実の理想像を表すといえる。

男性を攻撃するつもりもないし、男性性の価値を貶めるつもりはない。男性性は私たち女性の内にも存在し、女性を勇気づけ、理性的にし、活気を与えてくれる。しかし、現在最も必要なことは、自分たちの中に、社会の中に、男性の中に、女性の中に、無視され、見捨てられた、女性性を探し出すことである。この傷ついた女性性を癒し、救済し、回復させ、さらに正当な場所を与えていくこと、そのことによって、女性はもちろんのこと、男性も人間としての全体性を取り戻すことができ、新たな、豊かな関係へと入っていけるのであり、社会、地球、自然も癒されていくのである。

重複する点もあるが、もう一度ここで明確にしておきたいのは、女性性について述べているのであるが、女性性の体現者は伝統的に女性であるとされているために女性について述べているということである。女性がまず、自分のなかの女性性を救済すること、その価値を尊重できるようになることから始めたいのである。

2. 女性性と男性性

普遍的な性別の原理についてもその差別は、歴史をさかのぼらねばならない。詳しい考察は、今後にゆだねるとする。少しだけ触れておくと、聖書物語(紀元前850年ごろ、旧約聖書にもちこまれ、書き直された古代バビロンの物語)では、イブはアダムの肋骨から作られた。また、パンドラは、ゼウスの命令で、ヘパイトスがつくりあげたものである。ポリー・ヤング・アイゼンドロース(1996)は「男性

の経験から作られた『女性』であるがゆえに、このような女性存在は根本的に不十分とみなされた」と述べている。また、實川（2001）は次のように述べている。「アリストテレス（Aristoteles）の影響を受けたキリスト教神学では神は完全なもので、したがって、永遠に変化しない。それは父なる神の理性として現れる。これに対し、母に比定される物質が、『産み出し』て変化するのは、不完全だからこそなので、神の本質とは相容れないと解釈される。西洋において、『産む性』としての女の蔑まれた理論的支えの主な一つがここにみられる」と。ジューン・シンガー（1996）も、女性性の抑圧の源泉としては、父権制社会全体というよりむしろ宗教そのものがあげられると指摘している。西洋にかぎらず、東洋でも、女性原理は男性原理に劣るとされてきた。東洋の哲学者たちは性のちがいを無視するか、あるいは女性の精神的地位は男性よりも低いとみなすかのどちらかの傾向にあった。また仏教では、女性は穢れたものとみなされた。西洋と東洋を統合したユング心理学においても、アニマを男性の内なる女性性と限定してしまったところが、検討されねばならないと筆者は考えている。

この父権的社会のなかで、家庭に留まることも望まず、自分たちの母のようにすることも望まず、また、攻撃的になることも、男性のようになることも望まない女性が、男性社会の中で、一人の女性であろうとすることは一体どういうことなのであろうか。女性としての自分を十分経験し、依存的でなく、独立した個人であるというしっかりした自尊心を持つことができるのか。

女性の本質は単に懐胎する子宮に象徴されるような、大地的でグレートマザー元型とよばれるものにルーツをもつだけであるのか、受容し、包含し、他者を育て、世話をし、励ますことのみで限定されるのであろうか。

以下にこれまで語られてきた女性性と男性性の本質の一部を筆者なりに表にすると以下のようになる（表1）。

3. 女性性の疎外

Feminineフェミニンという言葉は、ラテン語で、womanウーマンにあたるフェミーナfeminaからきた形容詞である。フェミニン（the Feminine・女性性）が名詞で使われる場合は人間のところに内在する普遍的なパターンを意味する。これはユングが元型と呼んだものであり、どちらかの性に限定されるものではない。女性性と男性性は意識の構造に関するもので、人間の経験の見方、反応の仕方の二つの方法である。またそれらは、世界中のどこでもみられる生まれながらに組み込まれた対立する二つの根源的なメタファーとなっている。その対立は自然界にも象徴的な世界にも存在するものである。ユングは男性の内的世界の女性的側面をアニマと名づけて、男性だけのものとしたが、多くの女性は、女性の内的世界にもアニマが存在するのではないだろうか。ヒルマン（Hillman, J., 1985）は、アニマが女性にとっても男性と同様に重要であると述べている。

ジューン・シンガー（1996）は、女性原理が父権制社会の文化から疎外されてしまったことの結果次の五つのレベルで問題になっているという。重要な指摘なので、ここで概略しておきたい。元型的レベルでは、生物学的な違いに基づいた男性と女性の違いが性役割の分裂になってしまっている。男性的である、あるいは女性的であるとみなされるものが実際に体験したことの直接的な結果であるのか、古い時代からのイメージを現代にもちこんだものなのかを明確にすることは難しい。ユング心理学では元型的な力がイメージや心の構えを作り出すと考える。古代の神々のイメージが心の中で鑄型として作用し、男女の性のステレオタイプを生み出す。したがって、現代の重要な問題の幾つかは、元型的な基礎をもつ光をあてて考えなければならない。個人的な人間関係のレベルの問題である。男性と女性は各々の内的な価値観にもとづいて反応しあうものである。その内的な価値観の

表1

女 性 性	男 性 性
感 情	理 性
主 観 性	客 観 性
い の ち	切 断
育 て る	分離・個別化・区別・弁別
やさしさ	自 主 性
直観力・理性を超えた知恵	独 立 心
受容性・包容性・包括性	自 己 主 張
パラドックス	前面にでること
不確実性・流動性	強 さ
恵み深い	意 志
豊 か	分 析 的
深い知恵	コントロール
ファンタジーや想像力の源泉	拡 散
陰	征 服
内向・内省性	英 雄 的
集 合	知 的
結 合	芸 術 的
自然や宇宙と感応する力	スポーツマン的
つながりあい・関係づけ	名 誉
全体をそのまま認識	階級主義的
全体をそのまま経験	忍 耐
許 す	乗 り 越 え
産出する	努 力
吸収する	創 造
溶解する	一 方 向
統合する	英雄の伝統
両 義 性	
は ら む	
知恵の源泉	
瞬間にいきいきしている	
むなし	
たよりない	
不 確 定 な	
うっかりした	
創 造 性	

一部は元型的要素によって、決定されているであろう。自分自身をどのように見るのか。権力、支配、権威、自己評価を持っているかどうか。自分とは違う性をどのように見るのか。このようなことが重大な影響を及ぼして、個人的な人間関係の質を決定することになる。

社会的なレベルでの問題である。男性の役割と女性の役割の分裂は、権力と権威における違いに基づく問題である。どのような制度の下で男性が権力を持ち、どのような時に決定権を持つのかなどについて、注意深く検討することも必要である。環境レベルの問題である。地球を汚し、自然を破壊しているのは、女性原理を疎外し、世界や自然を支配しコントロールしようとする男性原理の一側面である。精神的レベルの問題である。権力を持った人々の多くが、人類の福祉を包括的進化論的にみるよりは、即座の利益、欲求充足に関心を示すからである。人類の生命を救い、地球を救う一方で、「天上における裂け目もいやさなければならぬ」とシンガーはいう。なぜなら、あまりにも長い間現代の男性も、女性も、魂、つまり私たちのなかに潜む不滅のものを探求することを怠ってきたからである。トランスパーソナル心理学の台頭も、この点への警鐘であると筆者は考えている。

この後、シンガーは、ユダヤキリスト教の伝統の中で失われた女性性の惨事を追跡している。詳しいことは別の機会に譲りたいが、父なる神というように、聖なるものが老賢者というイメージで、崇められることによって、聖なるものは自然や、人間の身体から、分離させられたと考えられる。このことは、すでに述べたことに通じる。このことに関して、少し関係するので、述べておきたいがユングは1952年に「ヨブへの答え」を著した。林道義(1998)によるとこれは1950年に法王ピウス十二世が、「マリア被昇天」を正規の教義として認めたのを受けて「マリア被昇天」と「ヨブ記」との関連を論じたものであった。くわしいことは省くが、神の世界で男性性が支

配し、女性性が、排除されてきた偏りを補償するものとユングは考えた。すでに、ユングが「マリア被昇天は神との中に女性性が受け入れられたことを意味する」と考えたことは林も述べているようにきわめて独創的なことであり、注目に値する。

4. 女性における女性性の阻止

では、女性において、自然な女性性がどのようにして阻止されるのだろうか。心理療法師のエミリー・ハンコック(Emily Hancock 1981)によれば、8歳から10歳の間、少女はまだ、無邪気で遊び盛りであるが、そろそろ自制的になり、責任感が出てくることを見出している。さらに、思春期になると、母親が公の場に登場し、自然な発達は抑えられ、文化的な枠組みに入るように強いられる。もし、女性が自分らしさをとりもどしたいなら、初期の自分の記憶を呼び戻すことによって、自分らしさを取り戻すことができるのであると主張している。

ハンコックの主張に相当する筆者の事例をあげてみよう。

[事例A] 70歳のAは、うつ病の夫をかかえ、依存的で思うようにならないときには、怒鳴り散らす夫の世話に疲れ果てて、自分を取り戻したいと来談された。企業戦士であった夫は妻であるAがいないと何もできず、Aは妻として、専業主婦として、ひたすら夫に仕えてきたのであった。しかし、70歳の今、自分の人生がわからず、このままでは、自分の死を迎えられないと決意されたのであった。カウンセリングのなかで、Aは自分の子供時代を思い出されていた。小学校低学年までは、元気で遊びまわり、近所のガキ大将を泣かしたり、いじめられている男の子を助けてやたこともあったような、活発な女の子であったという。しかし、いつの間にか、母親の手伝いをよくするおとなしい女の子になり、兄たちの身の回りの世話も面倒もよくみる少女に成長してしまったとのことであった。

まさによくみられる日本の母といった生き

方のものであった。おそらく、Aの面倒見のよさが、大会社の管理職までいった夫を生活面では子供のままだにしてしまったのだろう。その後Aは、少女時代の自分と結びつくことによって、自分を取り戻し、夫にも自己主張できるようになり、夫から少しずつ距離を置くこと、外の世界（ボランティアなど）にも出られるようになったのであった。

この事例に見られるように、多くの女性たちは、長い間、他者の庭の世話をし、他者の発達のために必要なものを提供してきたが、自分自身の発達にはあまり無関心であった。私たちの世代の母親たちは、人生を諦めており、「今度生まれてきたら～したい」と次の人生に望みを託しているようだ。しかし、最近、中年をすぎた女性たちが少しずつ、自分の内的発達に関心を示しだし、カウンセリングを受ける現象が起きている。これはユングの言う、個性化に相当することで、何歳であろうと遅すぎることはない。しかし、私たちの母親も母親である私たち自身も女性であり、この時代を生きているがゆえに女性のスピリットを見失い、かといって自然に満ちた力強い母性もみうしなっている。そして、自己の価値や、人生の意味を見出せずに苦しみ、傷ついているので、娘のモデルには到底なり得ないという思い込みに陥っている。

さらに現在の日本では、まだ母-娘関係について語ることはタブーとされているところがあり、眠り姫の状態といわざるを得ない。また文献も見当たらない。たとえば男性に依存し、男性の評価を気にしながら、怒りと恨みをかかえた自己信頼や自尊心をもてない母親を見続け、また、母性にも確信がもてない母親から育みを十分に受けなかったことによって、娘の自己信頼は低くなり、その娘が、母親になることによって、さらに悪循環が生じてしまう。子どもの虐待、放任、無関心だけではなく、自己中心的な父権社会の代理者として、母親が子どもを責めてたり、コントロールしてしまうということも少なくはない。筆者のクライアントの20代の女性は、夢のなか

で「母親に死ぬといって、追い詰められる」ことがたびたびあり、また「自分の身体をナイフで削る」夢をみるという。また、教養の高い母ほど、子どもを命がけで守るという本能から、切り離されていたり、母親自身が自分の女性としての生身の身体を受け入れていないということがよくみられる。筆者は、45歳以上の女性のエンカウンターグループを、時々行っているが、高学歴で知的職業についた女性たちが、50代、60代になっても自分の身体を受け入れられず、外見の容姿について男性の評価を気にして、男性の眼から、自分の身体について語るのをみてきた。ヨーロッパでは祖母たちが理想の体型のために、コルセットをはめて、十分に呼吸すらできないようにしたのと同じことなのである。知的な女性ほど、男性社会の価値観に、すっかり適応してしまい、男性の眼で、自分や他の女性を評価していることもしばしば見受けられる。ライナー・マリアナ・リルケは次のように語る。「少女そして女性は、彼女らの新しい生き方を求め、彼女ら自身が花開いていく場合、それが良いものであれ、悪いものであれ、男性的生き方の模倣者であろうとし、男性的な仕事のやり方の反復者であろうとする。その多元的変遷をやり抜いていくのには、ある目的がある。その目的とは、男性からの歪んだ影響を浄化して、女性特有の本質を手に入れるということである。」ここで、私たち女性は、男性とのかかわりの中から、得たものを見出し、またそれを浄化し、一人の真の女性として、男性に立ち向かい、かかわっていくことが必要であるということである。

私たち現代の女性は、男性からアニメを投影される。女性にもまさに男性のアニメ像のみを生きようとする人がおり、他方では、男性が女性にもとめるステレオタイプなパターンから、のがれたいとあがいて、男性化した対処法を身につけてしまう女性もいる。リンダ・シアーズ・レナード（Linda Schierse Leonard 1986）にいわせれば、これらのパターンは父との関係を十分築きあげられなかった

結果としての女性の基本的なパターンである。前者はプエラ（永遠の少女）で、男性社会に対して、愛想を振りまき、媚びることで適応しようとする。後者はアマゾンで鎧を身につけ、男性のように振舞い、男の社会で成功をおさめる。いずれにしても私たちは自分ではない女性になれど、社会から常にプログラムされているといっても過言ではない。ここで私たちは女性に大きな影響を持つのが、母親だけではなく、父なる世界であることに気づかされる。父なる世界は、内的には、アニメムス、神聖なる男性、父親元型として生じ、外的世界では、個人的な父、夫、恋人、息子、兄弟として現れる。個人的な父や文化の持つ父親的なものが要求するものに依じて、この二つの心理学的類型はつくりあげられる。筆者はかならずしも、純粹にプエラだけ、アマゾンだけとは限らず、女性の内面では、さまざまな元型が布置し、融合していると考えられる。しかし多くの現代の少女たちは社会に適応し、幸せになるには、不満だらけの母親のようになるのではなく、いわゆる「よい女の子」であると同時に性的に魅力的であることも求められることを感じている。そのためには、男性を喜ばせ、男性にとっての価値を身につけなければならない。このようなダブルバインドの状況のなかで、多くの個人は、混乱し、引き裂かれ、自分でない自分を生きることになり、にせ自己を発達させてしまう。それでは、女性がみずからの女性性をどうしたら見出し、救済できるのであろうか。筆者はつぎの物語のなかにそのヒントが隠されていると考える。（サンフランシスコのボーダーズという書店でこの絵本に出会ったとき、まさに共時的であり、その内容に目を瞠った。また子供向けの場所にこの絵本が置いてあることにも日本では考えられないことと驚いた。このような共時性を大切に扱っていくことが、まさに女性性なのである。）

4. アーサー王伝説「ガウェイン卿と忌まわしい婦人」

筆者が、この物語に出会ったのは1997年であったが、すでに、1990年に、ユング派の分析家であるロバート・ジョンソンがこの物語をとりあげていることを、コニー・ツヴァイク（Connie Zweig 1997）によって知らされた。

コニー・ツヴァイクが、物語を要領よくまとめているので以下に引用しておく。

【若い頃、アーサー王は、近隣の王国の森で密猟をしていて、その国の王に捕らえられた。領土や所有権の法を犯したものの罰として、アーサー王は、ただちに殺されていたかもしれない。ところが、この近隣の王はアーサー王の若さと魅力ある人柄にこころをうたれた。それで、1年以内に非常に難しい問いに対する答えを見出すことを条件に、アーサー王を解放したのである。その問いというのが、「いったい女性は、何を望んでいるのか」というものであった。これは賢明な男性でもたじろぐようなもので、若者にとっては手に負えないもののように思われた。それでも絞首刑になるよりましであった。それで、アーサー王は帰宅すると手当たり次第に尋ね始めた。娼婦や尼僧、王女や王妃、賢者や道化師等々、あらゆる人に尋ねたが、誰一人これと納得させる答えを出せなかった。

しかしながら、誰もが口をそろえて、その答えを知っている人はただ一人、それは年老いた魔女だということである。そのためには膨大な費用がかかるという。というのも、その年老いた魔女は破産するほどの値をふっかけるといなのが、このあたりでは周知の事実だということである。

その一年の最後の日がきた。アーサー王はとうとうその老婆に相談せざるを得なくなった。彼女は答えを出すことに同意した。そしてその値段はアーサー王の円卓の騎士のガウェインと年老いた魔女の結婚であった。ガウェインは騎士の中で最も立派な騎士であり、アーサー王の生涯の友である。アーサー王は恐れおののいて年老いた魔女をみつめた。彼女は醜く、歯は数本しかなく、山羊でさえ気分の悪

くなるような臭気を放ち、下品な音をだし、おまけにせむしだった。こんな胸の悪くなるような光景は他にはなかろう。アーサー王は生涯の友に、こんなひどい負担を引き受けてくれるようたのむことを考えただけでも、気落ちしてしまった。しかし、この駆け引きを聞いたガウエインは引き受けることに同意し、親友のためにならたいしたことでもないし、円卓を維持するためなら何でもないと断ったのである。

結婚式が、通知されて、老婆は知恵を与えた。いったい女性は何を望んでいるのかといえば、「自分で自分の人生を支配することを望んでいる」というのである。この答えを聞いたとたんに、だれもが偉大なる女性的知恵が語られたと思った。そしてアーサー王は助かった。訴えていた国王もその答えを聞いて、アーサー王を自由の身にしたのである。

しかし、結婚式がまだ残されている。宮廷の全ての人が出席したが、だれもアーサー王ほど安堵と不安の間で引き裂かれてはいなかった。ガウエインは礼儀正しく、やさしく、丁寧であった。老いた魔女のほうははしたないマナーを丸出しにして、ナイフやフォークも使わずにお皿から直接に食べ物をがつがつと口に運び、ぞっとするような音や臭いをだしていた。これまでに一度もアーサー王の宮廷にこんな緊張がはしたことはなかった。しかし礼儀は尽くされ、結婚式は終わった。

話によると、結婚式の夜も最悪だった。しかしそれには触れずに一つの素晴らしい瞬間だけを述べることにしよう。ガウエインが初夜の床の準備をして、花嫁が来るのを待っていると彼女はとても美しい乙女となって現れた。

男性が常に望んでいるような美しさだった。ガウエインは驚いて、これはどうしたことかと尋ねた。乙女が答えて言うには、ガウエインが彼女に礼儀正しかったので、一日の半分はぞっとするような面を、その半分には、優雅な面を見せるのだという。二つのうちのどちらを彼は昼間に選び、どちらを夜に選ぶのだろうか。これは男性の前に差し出された残

酷な問いである。ガウエインは素早く計算した。この美しい乙女を友人たちが見ることのできる昼間にして、二人きりになる夜にはぞっとするような老婆にするか、それとも昼間に老婆で、二人の親密になる夜には美しい乙女にするか。しかしガウエインは立派な男だったので、彼女に自分で、決めるようにと言った。そうすると、彼女は彼のために夜も昼も美しい女性でいましょうと答えた。それは彼が彼女を尊敬し、彼女自身に自分の人生を決めるようにと言ったからである。

(下線は筆者)

以上の物語は、イギリスの怪物花嫁の話 (Betsy Hearne 1995) として分類される場合があるようである。

しかし、ロバート・ジョンソンは、この物語をこころの内なる物語・こころの世界の物語としてみなしている。彼は別の著書 (1989) において「神話、物語にじっくり耳を傾ける方法を学びとると、特殊な心理的情報を伝え、こころについての深い真実を、教えてくれます」「夢が個人のこころのなかの力動を表現しているのに対して、神話は、社会、文化、あるいは民族などいわゆる集合的なこころのなかの力動を表現しています」と述べている。

「いったい女性は何を望んでいるのか」という問いは、永遠の問いであり、男性にとっても、女性にとっても難問である。この醜い魔女に姿を変えた老賢女をジョンソンの言うように、拒絶され、軽蔑された女性性の側面と解釈することもできる。しかし、ジョンソンの解釈は、筆者にとっては、ものたりない。それは、彼が男性であり、内的な苦しみに接していないし、内からこみ上げてくるものが感じられないからである。筆者は次のように解釈した。この魔女は、男性からも、女性からも阻害され、拒絶された部分であり、またそれは怨みや、怒りや、絶望を含んだものであり、父権制社会、男性社会始まってから、幽閉され、虐待されてきた女性性そのものの根源であり、真の女性性なのである。女性た

ちは、自分のなかのこの、忌まわしく、醜くされた、魔女を発見し、その声を十分に聞き、自分のなかに統合しないかぎりには、本物の女性にはなれず、空虚さをかかえることになるのだと感じている。この根源を回復しないかぎり、ほんとうには女性も男性も、環境も地球も癒されることはないのである。この物語のガウエインのよう、どんなにこの根源がぞつとするような嫌なものであっても、できるかぎり彼女に丁寧な礼儀正しく接し、彼女を尊敬することが大切である。彼女は発見され、理解されたときそれは女性にとっては、すばらしい充実感と女性としての誇りをもたらすものと変貌する。筆者はこの魔女が知恵（真理）を与えることができることも、グノーシス派の知恵の女神のソフィアと重なることに気づかされた。ソフィアは聖なる女性性（女性のスピリチャリティ）のひとつであり、私たち女性の源泉であり、進むべき目的であるとする。疎外され、阻止され、闇ののまれた女性性は、この魔女のように、胸がむかつくような忌まわしい存在になりはてしている。しかし、それをそのまま暗闇に閉じ込めておくことによって、女性性は成長も個性化のプロセスもたどることは難しい。現代人の不満や苦悩、さらには身体症状なども、この女性性の疎外と関係している。この物語のガウエインのような態度によって、その存在を発見し、敬意をはらってかかわっていくことが、真の美しさを回復させる方法であることを筆者は再度強調しておきたい。人類にとって貴重なる女性性の価値に気づきだした人はほんの一握りの人であり、その仕事はまだ手がつけられたばかりである。今後は、神話や昔話をはじめ、聖書や、仏教書、女性の夢、臨床事例などを手がかりにこの膨大な作業に取り組んでいくつもりである。

文 献

- B. ハーン (1995) 「美女と野獣」新曜社
コニー・ツヴァイク (1996) 「女性の誕生」山王出版

- 土沼雅子 (1994) 「夢と現実」二期出版
E. Hancock (1981) 「Womens Development in Adult Life」Ph.D. diss., Harvard Univ.
林 道義 (1998) 「ユング」河出書房新社
J. シンガー (1981) 「男女両性具有」人文書院
L. S. Leonard (1987) 「On the way to the wedding」Boston:Shambhala
P. Y. Eisendrath (1987) 「Female Authority」Guilford, New York
R. A. Johnson (1994) 「Femininity Lost and Regained」Harper Sanfrancisco
R. A. Johnson (1989) 「現代人と愛」新水社
S. Hastings (1985) 「SIR Gawain and the Loathly Lady」Mulberry books・New York
豊田園子 (1995) 「女性的なスピリチャリティと心理療法」精神療法第21巻3号